

第三篇

天^{てん}

地^ち

の

剖^{ぼう}

判^{はん}

霊主体従子の巻
〔霊界物語第一卷〕

第二〇章 日地月の発生 (二〇)

盲目の神使に迎えられて、自分は地の高天原へたどりついたが、自分の眼の前には、何時のまにか、大地の主宰神にまします国常立大神と、稚姫君命が出御遊ばしたもうた。自分分は仰せのまにまにこの両神より、貴重な天眼鏡を賜わり、いよいよ神界を探険すべき大命を拝受したのである。

忽ち眼前の光景は見るみる変じて、すばらしい高い山が、雲表に聳えたっている。その山には索線車のようなものが架つていた。自分は登ろうかと思つて、一步麓の山路に足を踏みこむと、不思議や、五体は何物かに引上げらるるような心持に、直立したままスウと昇騰してゆく。

これこそ仏者のいわゆる須弥仙山で、宇宙の中心に無辺の高さをもつて屹立している。それは決して、肉眼にて見うる種類の、現実的の山ではなくして、全く霊界の山であるから、自分とても霊で上つたので、決して現体で上つたのではない。

自分は須弥仙山の頂上に立つて、大神より賜つた天眼鏡を取り出して、八方を眺めはじめた。すると茫々たる宇宙の渾沌たる中に、どこともなしに一つの球い凝塊ができるのが見える。

※天眼鏡……むかしは望遠鏡のことを遠くまで良く見えるという敬意をこめて言ったことがありますがその意味くらいではないでしょうか。

※須弥仙山……仏説では妙高山・妙光山と漢訳、仏教の宇宙観によれば世界の中心に高くそびえる巨大な山。大海の中にあつて、金輪の上であり、その高さは水面から八万由旬あつて九山八海がとりまいててゐる。そのまわりを日月がめぐり、六道・諸天はみなその側面、または上方にある。その頂上に帝釈天の住む宮殿があるという。

それは丁度毬のような形で、周辺には一杯に泥水が漂っている。見るまにその球い凝塊は膨大して、宇宙全体に拡がるかと思われた。やがて眼もとどかぬ拡がりに到達したが、球形の真中には、鮮かな金色をした一つの円柱が立っていた。

円柱はしばらくすると、自然に左旋運動をはじめめる。周辺に漂う泥は、円柱の回転につれて渦巻を描いていた。その渦巻は次第に外周へ向けて、大きな輪に拡がっていった。はじめは緩やかに直立して回転していた円柱は、その速度を加えきたるにつれ、次第に傾斜の度を増しながら、視角に触れぬような速さで、回転しはじめた。

すると、大きな円い球の中より、暗黒色の小塊体が振り放たるようにポツポツと飛びだして、宇宙全体に散乱する。覗ればそれが無数の光のない黒い星辰と化つて、或いは近く、或いは遠く位置を占めて左旋するように見える。後方に太陽が輝きはじめるとともに、それらの諸星は皆一斉に輝きだした。

その金の円柱は、たちまち竜体と変化して、その球い大地の上を東西南北に馳せめぐりはじめた。そうしてその竜体の腹から、口から、また全身からも、大小無数の竜体が生れいでた。

金色の竜体と、それから生れいでた種々の色彩をもった大小無数の竜体は、地上の各所を泳ぎはじめた。もつとも大きな竜体の泳ぐ波動で、泥の部分は次第に固くなりはじめ、水の部分は稀薄となり、しかして水蒸気は昇騰する。そのとき竜体が尾を振り廻すこと

に、その泥に波の形ができる。もつとも大きな竜体の通った所は大山脈が形造られ、中小種々の竜体の通った所は、またそれ相応の山脈が形造られた。低き所には水が集り、かくして海もまた自然にできることになった。この最も大いなる御竜体を、※大国常立命と称え奉ることを自分は知った。

宇宙はその時、朧月夜の少し暗い加減のような状態であつたが、海原の真中と思わるる所に、忽然として銀色の柱が突出してきた。その高さは非常に高い。それが忽ち右旋りに回転をはじめた。その旋回につれて柱の各所から種々の種物が飛び散るように現われて、山野河海一切のところに撒き散らされた。しかしまだその時は人類は勿論、草木、禽獣、虫魚の類は何物も発生してはいなかつた。

たちまち銀の柱が横様に倒れたと見るまに、銀色の大きな竜体に変じている。その竜体は海上を西から東へと、泳いで進みだした。この銀色の竜神が、坤 金神と申すのである。

また東からは国祖大国常立命が、金色の大きな竜体を現じて、固まりかけた地上を馳せてこられる。両つの御竜体は、雙方より顔を向き合はせて、何ごとかを牒しあわされたような様子である。しばらくの後金色の竜体は左へ旋回しはじめ、銀色の竜体はまた右へ旋回し始められた。そのため地上は恐ろしい音響を發して震動し、大地はその震動によつて、非常な光輝を發射してきた。

※大国常立命……大地形成時の御竜体（金竜）左。宇宙を創造し守護されるときのご神名、および敬称。

このとき金色の竜体の口からは、大なる赤き色の玉が大音響と共に飛びだして、まもなく天へ騰つて太陽となった。銀色の竜体はと見れば、口から霧のような清水を噴きだし、間もなく水は天地の間にわたした虹の橋のような形になって、その上を白色の球体が騰つてゆく。このとき白色の球体は太陰となり、虹のような尾を垂れて、地上の水を吸いあげる。地上の水は見るまに、次第にその容量を減じてくる。

金竜は天に向つて息吹を放つ。その形もまた虹の橋をかけたように見えている。すると太陽はにわかにか光を強くし、熱を地上に放射しはじめた。

水は漸く減ってきたが、山野は搗たての団子か餅のように柔らかいものであった。それも次第に固まつてくると、前に播かれた種は、そろそろ芽を出しはじめる。一番に山には松が生え、原野には竹が生え、また彼方こなたに梅が生えだした。

次いで杉、桧、槇などいう木が、山や原野のどこどこに生じた。つぎに一切の種物は芽を吹き、今までまるで土塊で作った炮烙をふせたような山が、にわかにか青々として、美しい景色を呈してくる。

地上が青々と樹木が生え始めるとともに、今まで濁つて赤褐色であった天は、青く藍色に澄みわたつてきた。そうして濁りを帯びて黄ずんでいた海原の水は、天の色を映すかのようになつてきた。

地上がこうして造られてしまうと、元祖の神様も、もう御竜体をお有ちになる必要がな

※太陰……月界のこと。

※元祖の神様……大国立命。

くなられたわけである。それで金の竜体から發生せられた、大きな劍膚の嚴めしい角の多
 い一種の竜神は、人体化して、莊嚴尊貴にして立派な人間の姿に変化せられた。これはま
 だ本當の現体の人間姿ではなくして、靈体の人間姿であつた。

このとき、太陽の世界にては、伊邪那岐命がまた靈体の人体姿と現ぜられて、その神
 をさし招かれる。そこで莊嚴尊貴なる、かの立派な大神は、天に上つて撞の大神とおなり遊
 ばし、天上の主宰神となりたもうた。

白色の竜体から發生された一番力ある竜神は、また人格化して男神と現われたもう
 た。この神は非常に容貌美しく、色白くして大英雄の素質を備えておられた。その黒い頭
 髪は、地上に引くほど長く垂れ、髻は腹まで伸びている。この男神を素盞鳴大神と申し上
 げる。

自分はその男神の神々しい容姿に打たれて眺めていると、その御身体から真白の光が現
 われて、天に沖して月界へお上りになつてしまつた。これを月界の主宰神で月夜見尊と申
 し上げるのである。そこで大國常立命は、太陽、太陰の主宰神が決つたので、御自身は地上
 の神界を御主宰したまうことになり、須佐之男大神は、地上物質界の主宰となり給うたので
 ある。

(大正一〇・一〇・二〇 旧九・二〇 谷口正治録)

※靈体の人間姿……未だ幽体の時代で、肉
 体の發生以前のことですから、われわれの
 想像をはるかに超えた太初のことですね。

※かの立派な大神……白色の竜体から發生
 された大英雄神たる素盞鳴大神のこと。

※撞の大神……天上の主宰神たる神素盞鳴
 大神さま。

※素盞鳴大神……瑞靈の大神のこと。

※月夜見尊……月界の主宰神。素盞鳴尊の
 神靈が太陰界を守護される時の神名。

※須佐之男大神……素盞鳴尊の神靈が地上
 物質界の主宰となりたもうた時の神名。

瑞 月

世の中の知識を捨て、惟神

胎藏経を宣ぶる真人まことひと

賢哲の疑問に答へ世の中の

もつれをさばく天津神人

日を追ふて神の経綸進みけり

やがて天下に大渦捲かむ